

適性型 I 表現力

注意

- 1 問題は **I** のみで、4 ページにわたって印刷してあります。
- 2 試験時間は四十分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入すること。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 受験番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

問題は1ページからです。

1 文章1と文章2を読み、あとの問題に答えなさい。

(*印のついている言葉には、本文のあとに「注」があります。)

文章1

中学や高校では、一つの問いには一つの正解があたりまえ、という前提で勉強する。私の書いた文章もよくマークシート式の試験に使われて、「著者はこの段落で何を言いたいのか次の四つの中から選べ。」などといった問題になる。私もこれに挑戦してみるのが、自分の文章なのに解くことができないことがある。四つの選択肢のうち、二つには確かに私の言いたいことが書かれている。自分でも選びきれないが、そんな問題に対して皆さんはちゃんと一つ、私の代わりに確定してくれるわけだ。文章をつくるとき、いろいろな思いを込めている。伝えたいことがあっても*ストレートには言えないから、別の言葉に置き換えて*カムフラージュしていることもある。私が伝えたいと思っいる相手がなかなか気づいてくれないから立ちながら書いているとか、そういうことがある。読むだけではわからないし、そのときの気分を忘れているから、後で読み返しても表現の意味がわからないこともある。文章はそれぐらい*デリケートなものだが、その答えを一つに絞ろうと言うのだから、本当に不思議だ。

けれども世の中には問いと答えが一对一の問題は、めったにない。「光は波動であるか粒子であるか」という大論争があったが、これは

正解が二つある例だ。光は波動であることも正解、粒子であることも正解。両者は物質としてのあり方が違うから対立するのだが、どちらも正解として考えられている。

また、一つの問いに二つの不正解がある、つまり二つしか解はないがそのどちらも間違っているという例もある。「世界に果てはあるかどうか」という問いを考えてみよう。世界に果てが「ある」と言うのは間違いだ。なぜなら、果てがあるならその先はどうなっているのかという問いがまた生まれるから断言できない。一方、世界に果てが「ない」とも言えない。根拠がないからだ。*無限遠点をまだ確認できていないというだけのことかもしれない。そうすると、果てが「ある」のも「ない」のも正解にはなりえない。

それから、生きることの意味、自分がここにいることの意味はどうだろう。そんな問いに対する答えは、ない。問うことそのものが、答えの意味の大半を占めている。自分がだれであるかなんて、人間にはどうして答えることができない問いだろう。

(中略)

自分自身の問題や世の中に起こる出来事は、理由や意味がわからないものがほとんどだ。また、科学の*極限的な問題や、社会生活で重要な問題、生きるうえで重要な問題というのは、ほとんどが複数の解を持っていたり、正解が一つもなかったり、そもそも答えがない、というものはかりだ。だから、自分の持っている狭い枠組みの中で無理

やり解釈かいしゃくして、わかった気になっても何も解決しないし、とても危ない。必要なのは、わからないことでもこれは大事、としっかりと自分で受けとめて、わからないままにずっと持ち続けることなのだ。そして何度も体当たりして痛い思いをして、問題に正確に対処するすべを身につけよう。「頭がいい」と「賢いかしこ」とは何の関係もない。じぐざぐにいろいろな補助線を立てて、誠実に考え続ける、「賢い」人になってほしいと心から願っている。

(驚田清一おしだきよかず『何のために学ぶのか 「賢くある」ということ』より)

〔注〕ストレート ―― 率直ではっきりしている様子。

カムフラージュ ―― 様子をかえて、人の目をごまかすこと。

デリケート ―― 細心の注意をしなければいけない様子。

無限遠点 ―― 限りなく遠いところにある点のこと。

極限的 ―― 物事が限界にまで達している様子。

文章2

最近、私は、若い人からよくこんな質問を受けることがある。この間も、あるテレビ番組で、このような質問を受けた。

「学校で、いろいろなことを勉強するが、いったいその何パーセントが、将来の自分の職業や人生に役立つんでしょうか」

一言で答えるには、難しい質問である。確かに、実社会で活躍かつやくしている人でも、中学・高校で学んだことを現時点でテストしたら、少なくとも現実の仕事と関係のない科目では、できのよい今の中学・高校生以下の成績に終わるのがオチだろう。習ったことのかすかな記憶はあっても、ほとんどのことは忘れていて、解答をだすことは容易ではない。

多くの人の体験でいえば、学校生活のそうした記憶きおくは勉強内容よりも、あの先生にこういう風にほめられたとか、叱しかられたとか、*因数分解いんすうぶんかいは忘れたけれども、*因数分解いんすうぶんかいを習っている時には苦勞したとか、課外活動やスポーツでの*愉たのしさとかが、そういったことが一番印象に残っているのである。

では、なぜ人は学ぶのか。

人間の脳は、過去の出来事や過去に得た知識を、きれいさっぱり忘れてしまうようになってきている。もっと正確に言えば、人間の脳は記憶したことをほんのわずかしか取り出せないようになってきているのだ。それなのに、なぜ人は苦勞して学び、知識を得ようとするのか。私は、

それに対して、「知恵」を身につけるためだ、と答えることにしている。学ぶという中には知恵という、目に見えないが生きていく上に非常に大切なものがつくられていくと思うのである。この知恵がつけられる限り、学んだことを忘れることは人間の非とならないのである。例えば、忘れたことをもう一度必要にせまられて取り戻そうとする時、一度も勉強したことのない、全然聞いたことも経験したこともない人と違って、最低、心の準備ぐらいはできるし、時間をかければさほど苦勞しなくてもそのことを理解できることだっている。

知恵には、そういう側面がある。私はそれを「知恵の広さ」と呼んでいる。さらに、その「知恵」には、ものごとを深く見つめる「深さ」という側面がある。そして、ものごとの決断力を促す「強さ」と言う側面もある。

人は、なぜ、ものを学ばなければならないのかという問いに対して、私は、そういった「知恵」を身につけるためだということを解答にしている。

(中略)

本来、学問や勉強という言葉には、「受験勉強」と言う言葉に代表されるように、苦痛をとまなう退屈なものというイメージがある。ましてや私の専門は数学という学問である。学問の愉しさなどとは全く

*縁遠い存在だと見られがちである。

それでも私は、学問は楽しいもの、喜びを味わうものだと言いたい。

なぜか。それは学ぶこと、考えること、創造することの愉しさ、喜びを味わうことができるからだ。学ぶこと、それは楽しい。前述した「知恵」を身につけるためにも、それは楽しいことである。そして、考えることは、さらに楽しい。人生上、難問題にぶつかった時に深く考えなければならぬことは、確かに大変な苦痛をとまなう。でも、全般的な意味でいえば、楽しいものだといわざるをえない。

そして、ものを創造すること。私は、常々、「創造のある人生こそ最高の人生である」といつている。「創造」とは何かという問いもまたおぼつかしい。だが、この創造することは決して学者や芸術家の*専売特許ではない。われわれの日常生活の中で、たえず積み重ねられなければならないものであると考えている。

創造することの愉しさ、喜び——それは、おそらく自己の中に眠っていた、まったく気づかなかった才能、資質を掘り当てる喜び、自分という人間をより深く認識理解する喜びではないか、と思う。

(広中平祐『生きること 学ぶこと』より)

〔注〕 因数分解 —— 足し算や引き算で表されている数式を、か

け算の形に変形すること。

愉しき —— 愉快であること。楽しいこと。

縁遠い ———— ほとんど関係がない。

専売特許 ———— その人だけが得意とする技術や方法。

〔問題1〕 自分の文章なのに解くことができないことがあるとあり

ますが、それはなぜでしょうか。三十字以上四十字以内で書きなさい。(、や。などもそれぞれ字数に数えます。)

〔問題2〕 **文章2** の中で、若い人が筆者に質問をしています。質問

の内容と、それに対しての筆者の答えをまとめた次の文が完成するように、「①」と「②」にそれぞれ三十字以上四十字以内で適切な言葉を書きなさい。(、や。などもそれぞれ字数に数えます。)

【質問の内容】

・いろいろなことを勉強しても、「①」②」ので、将来の自分の職業や人生に、勉強が役に立つことはあまりないと思えますが、どうですか。

【質問に対しての筆者の答え】

・人はものを学ぶことで、「②」のため、勉強は必要です。

〔問題3〕 あなたが考える「学習によって成長できること」とは何

ですか。**文章1**と**文章2**、それぞれの要点にふれ、あなたの考えを四百字以上、四百四十字以内で適切にまとめなさい。

ただし、次の条件と、左の「きまり」にしたがいなさい。

条件1 三段落構成にし、さんだんらくこうせい第一段落には、**文章1**と**文章2**、それ

ぞれの要点をまとめること。

条件2 あなたの考えは、一つにしばって書くこと。

条件3 考えの根拠・理由も書くこと。こんきよ

〔きまり〕

- 題名は書きません。
- 最初の行から書き始めます。
- 各段落の最初の字は一字下げて書きます。
- 行がえは、段落をかえるときだけとします。
- 段落をかえたときの残りのます目は、字数として数えます。
- 最後の段落の残りのます目は、字数として数えません。

〔問題1〕

10点

で、	文章にはいろいろな思いが込められているの
答えを一つには絞れないから。	
40	20

*

〔問題2〕

10点

現実の仕事と関係のない科目については、習	つたほとんどの事を忘れてしまっ
たほとんどの事を忘れてしまっ	
40	20

*

・いろいろなことを勉強しても、
 ので、将来の自分の職業や人生に、勉強が役に立つことはあまりないと思いますが、
 どうですか。

10点 ②

経験を生かして、ものごとを深く見つめ、決断	力を促すといっただけで、
力を促すといっただけで、	
40	20

*

〔問題3〕

30点

440	400	300	200	100	20
-----	-----	-----	-----	-----	----

*
